

## Assembly 東日本予選 甲3 テーブル総評

ジャッジ：

大森（立教4）、桑野（東大4）、豊島（早稲田4）

テーブルメンバー：

廣橋（早稲田3）、宋（上智3）、伊東（早稲田3）、清岡（早稲田3）、河野（東大3）、戸田（法市3）、貝瀬（武蔵3）、下吉（立教3）、山田（武蔵3）

総評の流れ：

はじめに（豊島）→全体の流れ（豊島）→選定理由（大森）→リフレクション（桑野）

<はじめに>

この総評は、Assembly 東日本予選での 2nd テーブルと順位に関して客観的視点から判断したものを文章化したものです。テーブル内の感覚や判断と齟齬が生じることがあるかもしれませんが、客観的にはこう見えていたという参考程度に読んでいただくと幸いです。また、このテーブルではなかった人も甲ランカーのディスカッションから今後の参考にできる点を見つけてほしいと思います。言語に疎くて多々わかりにくいところがあるかもしれませんが、ご容赦ください。

<全体の流れ>

OP 候補者は廣橋くん一人でスムーズに決定。安楽死をトピックとし、TG の”死にたいと思えば死ねる”というプラスと J/G の”国民が自ら死を選ぶ”というマイナスのどちらを優先すべきか、また医療論題としてどちらの視点を重視すべきかを論点としたいと話した。どうやってプラスを証明するのか、具体的にコンパソンでどう話していきたいのなどの質問が飛び交ったのち TG の説明へ。TG は病気を治したいと思っている末期患者だった。QL コンパソンをやりたいという OP に、Harm では末期になっていないときや死後の S/M を含めるのかについての質問などが 1 時間ほどあり、その後 APA サイドへ移った。「OP がなぜその TG を救いたいのか」や「死ぬという選択肢を与えないマンドートと OP のマンドートとでマンドートコンパソンがしたい」などの話が出てきたり消えたりしながら、ディスカッション開始から 2 時間経った時点でワーカビリティに清岡さんのオブジェクションが登場。現状 TG が自殺をしていないなら AP で TG は安楽死を選ばないというオブジェクションに対し、OP である廣橋くんが、現状で自殺している人は AP で安楽死するという A/L/1 を使った反論を出し清岡さんのオブジェクションは終了。その後すぐ AD は立論され、

宋くんと清岡さんが DA 候補として登場。両者とも似た TG を提示しており、コンバインの案も出たが、結局廣橋くんのコンパリ想定に沿った宋くんの **want to get plus of life** という will を持った patient が DA に選ばれた。この DA は TG がもし生きていたら得られたはずのプラスが安楽死のせいで得られない、という政府視点での想定であるという説明であった。その DA に対し、伊東くんが DA の NFC で”TG 目線でのマイナスは確認できない”というオブジェクションを出したところで時間が来て終了した。

選定理由（文責：大森）

ここでは、参加者がなぜその順位になったのかの解説と、それぞれに対する所感などを記していく。順位に関しては評価基準を用いた、ある程度の客観性が担保されたものであるが、その他の項目に関しては筆者の感想文のようなものなので、そのつもりで読んで頂きたい。この項が次世代にとって有益なものとなることを願う。

### 1 位：廣橋（早稲田 3）

オピニオンプレゼンターとして一貫した論を展開し続け AD 立論に至ったこと、優れた理解力や表現力を活かしたカンファメーション、アーギュメントへの対応などを評価しこの順位となった。ただしこのテーブルが、すでに説明されていたことの再説明に多くの時間を割いてしまったことなどに関しては、説明不足・浸透不足として責任の一端を負う。とは言うものの、彼は圧倒的な能力を持っており、近年みられなかったオピニオンプレゼンターとしての甲テーブル 1 位になったことは賞賛に値するだろう。今後はその能力や姿勢（独特のスーツの着こなしではなく議論への思い）を後輩へ伝えて行って欲しい。

#### 彼のディスから考えて欲しいこと

彼の特徴の一つは、持論を用意し論点として提示する姿勢である。こう聞くと単なるオピニオンプレゼンターのように聞こえるが、彼はいわゆる通常のフォーマットに付加的な説明をし、工夫をしてくる。これは近年のディス界に欠けている要素である気がする。

その一つの現れだったのは、本テーブルでオピニオンプレゼンターの立候補者が 1 人しかいなかったことだ。私個人の印象ではあるが毎年、甲テーブルなどの重要度の高いテーブルでは、複数人が立候補し下克上などを狙ったり、自分の爪痕を残そうとしたりする。そういった姿勢が見られなかったのは残念であった。理由の 1 つとして、オピニオンプレゼンターは多くの説明責任や立証責任があり甲テーブルでは勝ちづらいということが挙げられる。しかし、準備を徹底すればテーブルでの役割を確立することができるはずなので、今一度考えて見て欲しい。

## 2位：宋（上智3）

圧倒的な理解力や議論を俯瞰する力を活かした鋭い質問・カンファメーション・話の取捨選択への貢献を評価しこの順位とした。しかし、周りとの理解の差を埋めることに苦勞し、彼の得意とするコンパリソンなどのフィールドに持ち込めなかったことが痛手となり、1位になることはできなかった。彼の能力と筋力を考えれば、ファイナルにいてもおかしくない存在であるため、この経験から学んだことを活かして次世代の強化に当たって欲しい。

### 彼のディスから考えて欲しいこと

本テーブルで彼は、止むことのない質問やダウトへの対応に苦勞し、本領を發揮することができなかった。普段の彼ならば、圧倒的なプレゼンスや論理への強さを活かしてそういったものを捌いていくのだが、甲テーブルでは一筋縄ではいかない。甲テーブルには他の大会にはない特徴がある。それは人数が多いこと、全員が一定以上のレベルであること、そして意地とプライドがぶつかり合うということだ。この特徴から、時に「進度」が大きく損なわれるのである（実際筆者の時代以前もそうであった）。皆はこの現象への対策を考えなければならない。対策とは、①この現象を抑える為に働く、もしくは②現象に対応した別の戦略をとる、ことになる。①は徹底したセオリーでの捌きや、論点を収束させるようなカンファメーションなどのスキルを磨くことが中心で、②は他者を凌駕するアーギュメントやサジェスションなどの立ち回りを考えるのが中心だろうか。

このテーブルでの彼は、①に関しては不十分に終わり、②のような戦略変更も行わなかった。彼は良くも悪くも自分を貫いたのだ。それは立派だとも思う。しかし、今後これを読んでいる人がこういったテーブルに当たり、どうしても勝ちたいのならば、思い切った決断も視野に入れると良いだろう。

ここで、3位以下はほとんど差がなく数回の有効発言で順位が大きく入れ替わる可能性があったことを記しておく。

## 3位：伊東（早稲田3）

本テーブルでは意見提示が主な理由でこの順位となった。彼は、納得するまで質問や反論を行うことができる。その芯の強さこそが彼を3位に押し上げた要因であろう。しかし、発言数に対する有効発言数は少なく、進度不足の一因になってしまっていたことは反省点である。隣に腰掛けていたオーソリの権化にも屈しないその心を受け継ぎ、より多くの貢献ができる後進の育成に励んで欲しい。

### 彼のディスから考えて欲しいこと

自分がそのテーブルで理解が追いつかない時や置いていかれている時、皆はどうするで

あろうか。ある者は追いつこうと必死に質問やカンファメーションをし、またある者は足掻くことはせず機を待つ。果たしてどちらが良いのだろうか。

風潮として、後者が前者を邪険にすることがある気がする。実際、現役の時、筆者は後者であり、自分が活躍できない時は黙って邪魔をしないことがマナーや美徳であると考えていた（批判を恐れずに言えば、前者の介入を鬱陶しいとさえ感じていた）。しかし、時にこの考えは覆される。分からないことを「分からない」と口に出すことは非常に勇気のいることであり、ある種の才能であるからだ。必死に食い下がり、泥臭くとも上を目指す、そんな者を見ると、「自分は分からないとは言えない臆病者で、マナーなどと自己正当化していたに過ぎないのではないか」とも思われるのだ。

どちらかが正しいなどと明確な答えが出る問いではないことはお分かりだろう。ただ、考えを巡らせることはして欲しい。そして筆者は、本テーブルで闘い、3位という好成績を納めた彼を素直に尊敬する。

#### 4位：清岡（早稲田3）

主に意見提示が評価対象となりこの順位とした。彼女が本来持つ理解力や高いスキルなどが活かされなかったことは残念であるが、男性社会でやりづらいこともあったと思われるこの代で、女性ディスカッサントとして類い稀なる成績を残した彼女には賛辞を送りたい。女性ディスカッサントの星として、ゴリラなどの猛獣の抑え方を後輩に伝えていって欲しい。

#### 彼女のディスから考えて欲しいこと

区別を推奨するつもりは無いが、ディスカッションにおける男女差については一考の余地ありだろう。ディスカッションにおいて男女のプレイスタイルの違いから苦勞する場面は多くの人を経験したことがあるのでは無いだろうか（筆者も女性が大半のテーブルだとやりづらさを感じることもある）。安定したパフォーマンスをするには、この差を考慮することも重要だと考える。自身の代は女性社会か男性社会か、個々のテーブルでの男女比はどうか、それを踏まえて自分はどう立ち振る舞うべきか、考えてみて欲しい。もしこれを読んでいる君が女性で、男性ディスカッサントが苦手であるなら、彼女に教を請うと良いだろう。

#### 5位：戸田（法市3）

質問やダウトを中心に複数回意味のある介入を行った為、この順位となった。また彼の介入はよくある平凡なものではなくユニークな角度からのものだった。そういった視点での介入をより具体化し、意見提示やサジェスチョンまで繋げていけば順位は変わっていただろう。その草食動物の様な落ち着きからくる質の高い介入を後輩たちへ伝授して欲しい。

### 彼のディスから考えて欲しいこと

彼の特徴は、焦らず自分の役割を見つけ仕事をするることである。ディスカッションにはそのテーブルごとにテンポがあり、そのテンポに惑わされ調子を崩すこともしばしばある。彼が完璧に本調子だったとは言わないが、彼が介入した時の様子は普段の彼そのものであった。こういったテンポの早いテーブルでも自分のペースを崩さずに介入できるというのは讃えられるべきことであり、皆は見習って欲しい。さらに発展させ、テーブルのペースをコントロールできるようになれば、それは大きな強みとなるだろう。

### **6位：河野（東大3）**

意見提示が評価対象となりこの順位になった。内容は、日本政府にとっての DA（廣橋が述べていたもの）が無いマンドートがあるならそちらの採択を検討すべきである、というものであったが、反論性を伴ってはおらずダウトという形で終わってしまったことが悔やまれる。春セミ期からタスクなどについて考えを巡らせ、アーギュメントを練ってきた彼本来の意見提示ができていれば順位は変わっていただろう。ディス界を盛り上げてくれる UT 勢の次なるスターの育成に励む共に、外国人に間違えられても対応できるようになって欲しい。

### 彼のディスから考えて欲しいこと

彼がディスカッションを競技として本格的に始めたのは2年生の10月だそう。筆者が彼と最初に出会ったのは12月の大会で、その当時の彼は未熟であった。しかし春セミ期などを通して彼は大きく成長し見違えた。なぜ彼はここまでの猛スピードで成長できたのだろうか。ある者は、彼が日本最高学府である東京大学の学生であるからだと言うだろう。しかし筆者が思うところそれは本質では無い。彼の成長の理由は紛れもなく「努力」である。様々な先輩とプレパをして積極的に教えを請う、他大学のプレパに単身乗り込み学びを得る、人数が少ない時のジョイントにさえ顔を出す、彼のプレパ量は他者に伝わるほど多く、その弛まぬ努力が彼を甲ランカーにした。ディスカッションを始めるのに遅すぎることはない、彼の姿勢から学ぶことは多いはずだ。完全燃焼、とはいかないであろうが、春セミで悔しい思いをした彼が甲テーブル常連として存在感を発揮してくれていたことは筆者個人として喜ばしいことであった。

### **7位：下吉（立教3）**

ほとんど介入ができない中で、1回の質問によりこの順位がついた。テーブルでの役割を見つけることができなかつたのがパフォーマンスを発揮できなかった最大の要因であろう。ああいったテーブルで役割を見つけることは難しいが、役割意識や闘い方について今一度考えて見て欲しい。この結果に決して「足」することなく、この経験を後輩の育成へ

と役立ててくれることを期待する。

#### 彼のディスから考えて欲しいこと

彼はこのテーブルで役割を見つけられなかった。こういった者は毎年の甲テーブルで多く見られる。この問題は難解で、やる気を失わせる要因にもなってしまふ。一つのやり方として、伊東の部分で述べたように、がむしゃらに闘うというやり方もあるだろうが、それを嫌う者もある（下吉もおそらくそうであろう）。そういった者におすすめしたいのが、自身の強みを分析し、それ一点を徹底的に磨くというアッセン期の過ごし方だ。いわゆる没個性からの脱却である。これを考えたのには筆者の2年次の思い出が関係する。筆者いた当時の甲テーブルでは、1位想定と2位想定の方がしのぎを削り、その他の者が役割を見出せずにいた。そんな中で輝いたのは、3位になった者のある1回のカンファメーションであった。結果としては1、2位を追い詰めたときまではいかないが、その美しい介入は今でも記憶に残っている。記録より記憶に残るディスカッサント、そんな方向を目指してみるのも良いのでは無いだろうか。

#### **8位：貝瀬（武蔵3）**

介入は1回のみで、この順位となった。彼もまた下吉と同じく役割を見出せなかったのだろう。この苦い経験を、新たな強豪校誕生の糧にして欲しい。このランクというものが価値を発揮するのは取る前だけではなく、取った後もそうだ。その鋭い眼光を、今度は後輩へと向け、時には笑ってくれることを期待する。

#### 彼のディスから考えて欲しいこと

ディス界には栄枯盛衰があり、今その勢いを増しているのが武蔵大学であることは明らかである。彼、そして武蔵の活躍の秘訣は何なのであるだろうか。筆者はそれを「環境づくり」にあると考える。私が彼と初めて会話を交わしたのは池袋の芸術劇場前公園であった。そんなイレギュラーな出会いではあったが、彼はそこで「武蔵のマスターになって下さい」と初対面の私に言った。この度胸やプレパ環境を良くしたいという強い思いが結果に繋がったのでは無いだろうか。彼以外にも武蔵の何人かからは、様々な人に教を請う積極性を感じ取ることができ、成長著しい。ディスが上手になりたい、大学を強くしたい、そんな思いを持っているなら、どんなプレパをするか自分で考えるというだけではなく、誰に頼るかを考えることも重要である。先輩に声をかける勇気が未来を作ると信じている。

#### **9位：山田（武蔵3）**

介入がみられなかったのでこの順位となった。初めての甲レベルということで対応することができなかったのであろうが、彼が本来持つ思考力を発揮できれば介入することはできたであろう。この経験を元に今後は、1<sup>st</sup>における巨体の倒し方や甲テーブルで上位に入

る方法について考え、後輩に伝えていって欲しい。

#### 彼のディスから考えて欲しいこと

彼は貝瀬・佐宗と共に武蔵大学として初の甲ランカーとなった。このランクは一体何をもちたすだろうか。筆者の大学では、筆者の2つ上の代に初めての甲ランカーが誕生し、それから大学は勢いを増していった。もちろんランクだけがその要因であった訳では無いが、先輩のランクといのは我々後輩にとって大きな憧れであった。ランクを目指す、取るということは皆の思っている以上に多くの影響をもちたす。これからランクを目指す者はその目的を、ランクを取った者はその意味付けを考えていって欲しい。

皆さんへの愛が強すぎた結果、無駄に長いし主観たっぷりの駄文になってしまいましたね。お許しを。とにかく、伝えたかったことは、この大会をここで終わらせて欲しいという事です。この大会から学びをもちたす皆さまによる「REVIVE」を期待しています。

大森 紳吾

### <リフレクション>

文責 桑野

今回のテーブルのリフレクションを担当させていただくことになりました。議論を振り返る形で2つ、思ったことを述べさせていただきたいと思いますが、多分に主観が入っておりますので気になったことがあれば是非ご自身で振り返ってみてください。

#### ○「理解」について

今回のテーブルの感想を一言でまとめると「最初20分で解決したはずの論点に全て収束された議論」と言えます。現実には置き換えてみると、会議冒頭で確認されたはずの注意事項を会議が終わるまでずっと繰り返し確認したり、時には破ってみたり、とそんな感じです。かなりひどいです。こうなった原因はたった一つ、「わからないことをわからないままにした」ことです。曖昧な理解のまま進度を求めて先に進んだ結果、後々トラブルが巻き起こって結局後戻り、ということが3時間を通して起こり続けました。先へ進むためには何が必要であるか、もう一度考えてみてほしいです。自分が理解できている場合にはもちろんCをしたりSを打ったりと色々ありますが、個人的には理解している側か

らのアプローチは不十分であることが多いと考えます。「理解している人」は時に「曖昧な理解をしている人」の考えを十分には察せないことがあるためです。甲テーブルに来るような人は恐らく「テーブル内で何が起きているか理解できない」という経験を積んできていない、地頭が良かったりディスへの習熟度が高かったりとする方ばかりだと思いますが、だからこそ「自分がもし理解できなかったらどうするか」という点を考慮に入れない人が多いように思われます。「進捗」も「深度」も全て、適切な「理解」なくしては求められません。その部分への意識が欠けていたようなテーブルに感じられました。

そして、後輩にエデュケする際には是非「理解」を最優先に置くことを教えてあげてほしいです。アーギュを出した人に対して「A/L/1は??」と聞く、Qを出した人に対して「effectは?」と聞く、といった定型的なやり方を教えることも入口としては大切ですが、所詮は入口であって欠片ほども本質には触れていません。アーギュを出した人が本当に言おうとしていることは何なのか。「タスク」という語に嫌悪感を示してはいないか。相手が反駁してきたことは本質をついているのか。表情や雰囲気、言葉選びなど「内容面」以外にも「理解」すべき情報はたくさんテーブル内に転がっており、それを最も多く拾い集めた人が上手な反論やトリート、ハンドリングをすることが出来ると思います。3年生の皆さんも是非後輩のCPをする際は参考にしてみてください。

#### ○「話し方」の提示

僕らの代は（主観ですが）「話すかどうか」を必死に話していたので、そんな代の間人がこれを言うのはどうか、という批判を覚悟で書きます。今回のテーブルについて、またこの代全体について感じていたことが「話し方を提示する人がいない」ということです。幸いにも今年の代は「コンテンツ寄り」と評されることが多く、内容面についても比較的（僕らの代と比べれば劇的に）話すようになっていたと思いますし、それ自体は非常に良いことだと僕は受け止めています。それと「話し方の提示」については別問題です。この代には特に「どうやって話すの」あるいは「話せないからやめようよ」というように、話し方については投げたしまったり諦観したりする人が多いように思われますが、特にコンテンツ寄りと言われる代だからこそ「話し方の提示」には一定以上の価値があると思います。

今回のテーブルについて言うと、OPの意見に対してありとあらゆるダウトや意見が飛び交ったにも関わらず「それをどうやって話すか、という提案」あるいは「この意見は～という理由でこのように話されるべきだ、という主張」が一切なされなかったことは非常に残念でした。本質的な意見が出てきても、その話し方や話すエリア等については全てOPに投げたしまっているために他の半ば不要な意見と同質のものとして扱われてしまっており、非常にもったいな

いと思いました。意見を出すからには、それが話されるべきであると考えていることと思います（そうでない意見は後回しにされても仕方ないです）が、その自分の意見が「なぜ今話されるべきであると思うのか」「相手の話し方ではどこがおかしいのか」といった点まで含めた「コンテンツの提示」をする人は今回のディスにはいなかったことが惜しかったです。一つ目のリフレクションと重なる点もありますが、話し方の提示を自分からしないで相手に投げていると「あれ、やっぱりあの〇〇君の話は××で話されるべきだったよね？」と後々のトラブルの原因となり、内容面を深めようとしていたのに進度も深度も達成されない、ということが今回のテーブルでは非常に多く見受けられました。今後ディス界を引っ張っていくうえでも、重要なスキルである一つ「話し方の提示」について、是非一度考えてみてほしいなと思います。